■2016.4.10　福島第一廃炉国際フォーラム

福島第一原発の廃炉に向けた地域社会とのコミュニケーション

福島県のシンボル、ケヤキ・キビタキ・ネモトシャクナゲ（県HP)

崎田裕子　　ジャーナリスト・環境カウンセラー
NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット理事長

崎田のこれまでのコミュニケーション経験

＜理念＞くらし・地域の環境負荷に　市民・NGOとして責任を持ち
持続可能な社会づくりに貢献する

＜具体化のポイント＞　多様な主体の「連携」で「共創」する

くらしの ごみとCO2

くらしの 化学物質

高レベル 放射性廃棄物

福島の放射 性物質汚染

市民・企業・行政との パートナーシップで実施

全国各地で 学び合う場づくり

専門家・ NGO・行政 の情報共有

公設環境学習センター 指定管理者（自治体と連携）

3Rめざすマルチステークホルダー会議（企業・行政と連携）

アジア3R 推進市民 ネットワーク（環境省と連携）

「高レベル放射性廃棄物の地層処分」に関する地域ワークショップ（資源エネ庁事業）

「環境回復 勉強会」

NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネットとは

1995年からごみ問題解決へパートナーシップ育み、2001年から全国の個性ある地域環境活動を支援

◆「市民がつくる環境のまち“元気大賞”」表彰

- 応募約500団体と　ゆるやかにネットワーク
- 地域の環境活動リーダーが参画する全国ネット
- 「エコツアー」で全国の環境まちづくり団体の学び合い

◆「放射性廃棄物の地層処分に関する地域WS」

- 2007年から高レベル放射性廃棄物に関する地域WS実施
- 2016年度までに、約500名の地域リーダーと共に
  全国で90回を超える対話の場を運営。
  （資源エネルギー庁事業）

福島第一原発事故後の取り組み
「環境回復に関する勉強会」(2011～現在)

◆2011年6月3日の第1回目から約5年間に、40回継続開催

・放射性物質汚染からの一刻も早い環境回復・復興を願い、環境・廃棄物や原子力分野などの専門研究者、各省庁担当者、企業、自治体、NGO等対処に直接係る人々が呼び掛け合い、最新情報を基に意見交換。

・ 登録者は400人　毎回50人前後が参加している

◆意見交換テーマは、除染などの進展に合わせて参加者で検討

例「空間線量マップに基づく汚染物の推計や環境回復シナリオの検討」

「放射性物質汚染廃棄物・土壌等の処理シナリオ」

「除染ガイドライン、仮置き、中間貯蔵に関する意見交換」

「環境動態研究などの成果を環境回復・復興にどう活かすか」

「住民の方々の今後に資するコミュニケーションのあり方」　等々

◆共同呼びかけ人代表

・崎田と、東京大学大学院工学系研究科教授　森口祐一氏が共同代表

福島の方々の「想い」は「時間経過」により変化

福島県・原子力学会主催「除染推進に向けた地域対話フォーラム」
（2012～2013）のファシリテーション経験から

2011.3.11

東日本大震災による津波で、原子力発電所事故。「安全神話の崩壊」

↓

放射線リスクをしっかり伝えてこなかった「事業者や専門家・国への不信感」
「抑えられない　怒り・悲しみ」

↓

避難した方々含め、不安・不満はICT活用で瞬時の広がり
マスメディアには不安あおる専門家も登場
社会不安の増幅、 福島に対する多様な風評被害の高まりに 「困惑」

↓

「信頼」の再構築に向けて、「顔の見える信頼」づくり
「過剰なリスクと、付き合うリスク」を伝える専門家への信頼
除染・環境回復から復興にむけた生活再建、地域再生への想い

地域の放射線量の違いで「想い」も違います（2015崎田）

長期的に、年間追加被ばく1mSv以下に ← 数年で年間追加被ばく20mSv以下に ← 年間追加被ばく20mSv以上

除染 → 環境回復 → 復興

	日常生活を取戻す地域	帰還準備地域	避難継続地域
現状	家族と生活を継続中。自主避難中の若年世代も	避難中。又は昼間のみ戻り帰還準備	避難先の仮設住宅、仮住居等
除染	自治体が計画作成し実施中。終了する地域も	国直轄除染。元の家に住めるのか。部屋の中の除染は	国直轄除染今後計画策定も
目標	どこまで除染を徹底するのか。地域により復興の道を模索	20mSv以下でも、戻るには、安全に暮らせる安心を	何年後に戻れるのか、目安は
放射線の学び	除染・仮置き場説明会、学校。アドバイス人材整備。計測体験	除染・仮置き場説明会。学び・質疑・対話できる場	避難先での説明会等
健康	将来の健康。年間被ばく把握。親戚友人を早く呼びたい	将来の健康不安子供・若年世代の影響	将来の健康不安
食	食材線量・内部被ばく定量化。県外の風評被害に困惑	戻ったら、安全な食料が手に入るのか	山野草豊富な暮し、戻るのか
くらし	徐々に日常生活。農林漁業は。こどもの生活環境整備	仕事・学校・病院・お店は。農林業は。賠償との関連は	仕事・新しい暮らし　どう創るのか
地域	地域清掃・お祭り・自治会等地域の自主活動の再開	コミュニティー戻す場づくり。世代間の意見の違いも。	コミュニティーの再構築できるか
情報連携	自治体発行住民向け情報。地域で連携・協働の場づくり	一括した情報源・相談窓口・話し合いの場はあるのか？	自治体の復興計画とどうつなぐ

■福島第一原発の廃炉に向けた　地域社会とのコミュニケーション

福島事故後の環境回復・復興めざし

心通う住民対話と参加の仕組みづくり

福島県HPより

コミュニケーションの第1ステップ
　・リスク含む総合的な「情報」を伝える
第2ステップ
　・一方通行ではない「対話」の場づくり
第3ステップ
　・自主的な取り組みを支援し、「参加・共創」の実現へ

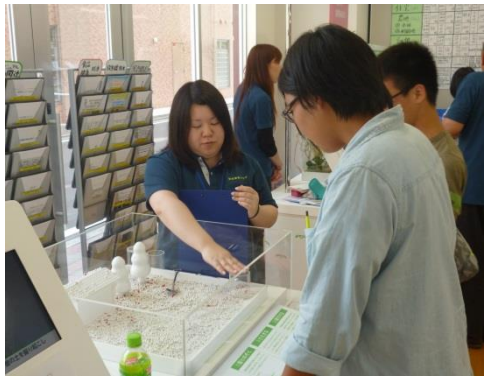
除染情報プラザとは　資料「除染情報プラザ」 http://josen-plaza.env.go.jp/

福島県と環境省が共同運営しており、除染や放射線に関する最新の情報を伝える拠点として、福島駅近くに2012年1月開設。

知る、考える、進めるために。

除染情報プラザ

福島県　環境省



「人から人へ情報を伝える」「人と人が話し合う」「人が人をサポートする」
除染や放射線に関する様々な情報提供や、
市町村や町内会、学校などへの専門家派遣等を行い、
地域とのコミュニケーションを推進している。

除染情報プラザの役割　資料「除染情報プラザ」 http://josen-plaza.env.go.jp/

除染や放射線に関する情報の提供

タッチパネル、大型モニター、映像や模型などを使った展示で、除染や放射線に関する最新情報をわかりやすく提供。
また来館者ひとり一人が日々抱いている疑問点などを、常駐のスタッフに相談することができる。

専門家派遣 移動展示

除染や放射線に関する専門知識や豊富な経験を持った専門家を市町村や町会、学校などへ派遣。　また、より多くの方に最新の情報を知っていただくため、パネルや模型などの移動展示や学校などへの出張セミナーも行ないます。

地域とのコミュニケーション

除染や放射線に関して、地域の方々とともに学び考えるためのセミナーやワークショップの実施、除染や復興に向けた活動を紹介する企画展示。
気軽に利用できるサロンスペースなど、
コミュニケーションの場も提供。

「ポジティブカフェ 」とは？

除染や放射線不安、福島再生に取り組む方々が情報を交換し、経験を共有するための情報交流会。

行政による除染が実施される中、地元の方々が主体となって、除染に関する活動や放射線のモニタリング活動、放射線の勉強会などが県内各地で行われていました。

このような中、地域の放射線不安の低減等に取り組んでいる方々と連携しながら、福島再生に向けた取組みを進めていこうと、2013年から「ポジティブカフェ」が始まりました。

2013
年度

地域活動としての放射線対策、線量低減活動の高まり

第1回ポジティブカフェ

第2回ポジティブカフェ

第3回ポジティブカフェ

「ポジティブカフェ」は地域の放射線不安の低減等に取り組んでいる方々と連携し、事例の共有と情報交換を行うことから始まりました。

線量測定や線量低減活動など福島再生に向けて様々な取組みを行う方々が、具体的な事例を通して交流。

第1、2回は主に線量測定や線量低減化等に取組む方々からの事例紹介。第3回は農地の測定などに取組む専門家や避難者支援団体の方などにご参加いただき情報を共有しました。

2014
年度

県外への避難者の方等の視点もふまえ
中通り地域の　放射線不安への対策と実践

第1回ポジティブカフェ

個人線量の測定体験 勉強会

食に関するワークショップ
（陰膳調査体験）　他

前年度の連携をベースに、中通り各地域の放射線不安の現状把握と対策について情報を共有しました。

まず、課題整理のためのミーティングを行い、そこで共有された現状や県外避難から福島に戻った参加者等からの意見をもとに、紙芝居で放射線を学ぶイベントや、地元食材を用いた陰膳調査体験、個人線量の測定体験　勉強会など、「測る」「知る」活動を、参加団体や様々な機関との連携のもと実施。

そうした経験を多くの方々と情報共有するために2015年2月に『みんなでこれからを考える「ポジティブカフェ」』を開催。多くの関心ある方々に参加を頂きました。

2015
年度

浜通りを中心とした地域との連携、情報共有へ

ポジティブカフェ@いわき

ポジティブカフェ@南相馬

ポジティブカフェ in 浜通り

前年度までは中通りでの活動が中心だった「ポジティブカフェ」。今年は、8月いわき、10月南相馬、12月楢葉と、浜通りの地域で「ポジティブカフェ」を開催。

浜通り北・南地域における地元の方々が抱える放射線の不安や、除染後のくらしの不安、これからの福島再生へ向けた取組みなどについて情報共有し、中通りで活動されている方々とも意見交換しながら、不安の低減と課題解決に向けて一緒に考えました。

2月11日には前年度に引き続き、『みんなでこれからを考える「ポジティブカフェ」2016』を開催し、多くの県民の方々と情報共有しました。

※2月11日の様子は「除染情報プラザ」のホームページもご覧ください。　http://josen-plaza.env.go.jp/

2015
年度

福島第一原子力発電所に近い浜通り。避難中の方、帰還された方、新たに住み始めた方など多様な方々の多い地域で開催した際の、主な意見

- 8月　いわき開催　「いまとこれから」を話題にしたワークショップ
- 10月　南相馬開催　「産業・ネットワーク・家族・心」をテーマに、「足りないこと・やっていきたいこと」を意見交換
- 12月　楢葉開催　「情報の伝え方」「多様性を認める」「新しく共に生きる」をテーマに対応策を意見交換。

【ポジティブカフェ＠南相馬でのまとめから】

- 放射線の不安の低減には、共有・共感する相手が必要で、そのためにも信頼関係づくりが特に重要（信頼関係がないと、相手の心を受け止められない、理解し合えない）。

  また、家族の中でも、もっと会話を通して共有する機会が必要。
- 放射能不安を払しょくし、互いの関係性（ネットワーク）を深めるためには、情報の共有と発信、交流の機会づくりがまだまだ必要。
- 放射能汚染からの産業の復興には、魅力ある仕事を担う人が必要である。里山・レジャー等の復活のためにも人づくり、そのための地域からの情報発信が必要。

資料「除染情報プラザ」（構成責任/崎田）

最後に　福島での対話経験から

◆廃炉は地域共生、地域再生との共存なくしては成り立たない

・廃炉は避難先からの帰還を考える方の重要な選択肢のひとつ

・廃炉とどう暮らす？　誇りを持てる仕事に

・これまでもリスク背負って支えてきた地域への感謝敬意の醸成

◆過疎高齢化は日本社会が抱える課題

双葉地域再生は、福島だけでなく全国の地方創生モデルに

・地域との共生は「生活インフラづくり」から

・地元の若者も学べる、廃炉技術者の人材育成拠点に

・廃炉の先の、将来を見据えた地域ビジョンと地域産業おこしを

◆そして、重大事故から立ち直る「世界の学びの場」めざして